

---

# 放課後ガールズトーク

着地した鶏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

放課後ガールズトーク

### 【Nコード】

N8812R

### 【作者名】

着地した鶏

### 【あらすじ】

人のいなくなった放課後で繰り広げられるいつものほのぼのとした日常。それはつまり乙女たちの放課後ガールズトーク。

放課後の教室は人もまばらで、聞こえてくるのは囁くように軽い談笑だけ。

駅前に新しくできたケーキ屋が美味しいとか、先日返ってきた試験の点数だとかいった些末な会話が飛び交う。そして教室からは一人また一人と人が減っていき、そのまま穏やかな沈黙が訪れた。

「よし、決めた！」

そんな放課後の静寂を突如破ったのは、近年稀に見る超ド天然少女 雪野ゆきほの口から飛び出た謎の決意表明と彼女が立ち上がった勢いでガタンと倒れたパイプ椅子だった。

教室に残っていたわずかな生徒達は一斉にゆきほの方へ目を向けるが、当のゆきほはそんな視線など全く気にしていない。いや、気付いていない、と言ったほうが正しいだろうか。

「いきなりどうした？」

ずれ落ちそうになった眼鏡を中指で戻しながら、彼女の友人 朝倉さくらは尋ねる。

「えへへ、あたし決めたんだ。あたしは名付け親界の神になるんだよー！」

よくぞ聞いてくれましたとばかりに、ゆきほはキラキラと瞳を輝かしながら答える……が、さくらはひどく呆れた顔で「はあ？」という声を漏らしたただけだった。そして、聞こえるか聞こえないかギ

リギリで「アホくさ」と呟いて、そのまま手元の文庫本に視線を戻した。

無論、朝倉さくらの呟きは不運にも雪野ゆきほの耳に届いたらしく、まだ幼さの残るゆきほの目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「うー！ ひどいよ、さくらちゃん。聞く素振りくらいしてくれただっていいじゃんか！」

プリプリとご立腹のゆきほをガン無視して、さくらはページをペリペリと捲っていく。ちなみに彼女が今読んでいるのは『最終兵器URASIMA ～深海魚帝国の逆襲～』というB級臭のポンプンするSF超大作である。

結局のところ、さくらにとっては、ゆきほの箸にも棒にも掛からない与太話よりも、一般人が決して見向きもしないようなB級小説の方が重要だったのだ。

「朝倉さん、そんな意地悪なことしないでゆきほちゃんの話ぐらい聞いてあげましようよ。ね？」

そう言って横からしゃしゃり出て来たのは、クラスメイトの栗栖クリス。

言動から察するに、ゆきほを気遣う優しそうな女の子に聞こえるかもしれない。だが、話している間ずっとコーヒー牛乳のパックのストローを啜えたままで、そしてそれを美味しそうにちゅるちゅると吸っているのを見ると、彼女が本当にゆきほを気遣っているのかどうかは全く定かでない。というか何を考えているのかよくわからない。

そして、朝倉さくらにしても栗栖クリスの言動には少々ムツとする点があった。彼女はゆきほの話とB級小説を天秤に掛け、実に真面目で理性的な判断からB級小説を選び取ったのだから、別にゆきほに対して意地悪している気など毛頭もなかった。

だが、何を考えているかさっぱりなクリスを敵に回すのは明らかに得策じゃない。無用な争いを避けるためにも、ここは素直にゆきほの話聞いてやるのが無難だな。

そう考えてさくらはパタリと本を閉じた。

「わかったよ、話ぐらい聞いてやるよ。で、何だっけ、種付け親界の神？　なんだそりゃ、馬主にでもなんの？」

「違うよ、名付け親界の神だよ！　な・づ・け・お・や！　わかる？」

「うっさいなあ……。それにそう言われても何が何だかさっぱりだ。私にも分かるように説明してくれ」

そう言ってお手上げだと言わんばかりに両手をひらひらさせるさくら。横にいたクリスも頭にはてなを浮かべて小首を傾げ、困ったような笑みでゆきほに向かってニコリと微笑む。

テレパシーでもあればいいのに、と眉間をつまみながら軽い溜め息を吐くゆきほ。もちろんその溜め息は目の前にいる友達二人に向けられたものではなく、自分が超能力者ではなかったと改めて気付かされたことによるものだった。

仕方がない、とゆきほは二人に向き直り、床に転がったパイプ椅子など気にも留めず直立したまま順を追って語り出した。

「あのね、自分の子供でもペットのワンちゃんの名前でも名前を付けるのってかなり大事なことじゃない？ 名付け親のセンスがモロに出ちゃっわけだからさあ」

「確かにそうね。でもあまりに奇抜すぎる名前はちよつとねえ。最近じゃ、名前の漢字だけじゃ読めない名前もあるらしいわね」

「ああ、『騎士』って書いて『ナイト』とかだろ。でも、花子とか太郎じゃちよつと味気ないしなあ」

依然とコーヒー牛乳を啜り続けるクリスと、それを眼鏡越しにジト目で見つめるさくらがゆきほの話に適当な相槌を打つ。流石にゆきほの話もまだ本題には入っていないだろう。

「そう、センスが良くてみんなが親しみを持って呼んでくれる名前ってというのが一番大事なんだよね。だから、あたし考えました！」

パンツと大きな音を立てて小さな手のひらで机を叩くのは、自信満々といったように頬を赤く染める雪野ゆきほ、その人だ。

「名前にね、その子の生まれた季節の漢字を入れるの！ ね、ね、これって良くない？ センスもあるし、ね？」

「季節？ 春子とか冬美とかそんな感じか。センス……あるのか？」

テンションの高いゆきほとは対照的に呆けた顔で朝倉さくらは聞き返す。だが、その言葉を聞いたゆきほの顔は笑っていた。まるで「その質問待ってました！ 計画通り！」と言いたいかのように。

「そう言われると思ったよ、さくらちゃん。でも、それも想定範囲内よ。ただ名前に春や夏ってつけるだけなら、あたしも名付け親界の神なんて名乗らないわ。あたしが考え出したのはね、こうよ！」

どこから取り出したか一本のボールペンを握り、ゆきはは大学ノートにガリガリと何やら勢いよく描き始める。そして、ビリリツと音を立てて破られたノートの切れ端には大きく丸っこい字で「椿」と「柊」と書かれていた。

「つばき……と、ひいらぎ……？」

「そう、可愛いでしょ。季節の漢字が入ってる木の名前ってかなりかっこ可愛いってことに気付いたのよ。これならハイセンスだし、読めない名前でもないでしょ。今日は一限目から授業中も寝ないでずっとこれ考えてたんだから」

「椿ちゃんに柊ちゃんかあ、とっても可愛い名前ね。それに生まれた季節が名前に隠れてるのって何だかとっても趣深いと思うわ」

エヘンと胸を張るゆきははさも世紀の大発見をしたというような顔で、小さな拍手を身に浴びながら満足そうに両手を広げて英雄凱旋のポーズを取った。

しかし、ぱちぱちと小さな拍手を送るのはクリスマスだったが、驚いたことに彼女の口元にはもうコーヒー牛乳のストローは無かったのだった。あれほど執拗に、ジャンキーのようにコーヒー牛乳を飲み続けていたクリスマスがそのコーヒーを自ら遠ざけるなんてには信じがたい。

ゆきの話とコーヒー牛乳を天秤に掛けて、彼女はゆきの話を取ったというのか。それほどまでに雪野ゆきはの名案（名前の案だけに）は来栖クリスマスに感銘を受けたのだろうか。

もちろん、そうでないと言いきることは出来ないが、彼女がコーヒ―牛乳を飲むのを止めた最たる理由は他にある。それは『コーヒ―牛乳のパックが空になってしまった』ことだろう……。

「どうでもいいけどさ」

勝手に盛り上がるアホ二名を夢から覚ます女子高生の声。朝倉さくらは頬杖をつきながら、二人の友人に冷ややかな目を向けていた。

「いいか、別に授業中に変なことばっか考えるのはいいけどさ。子供が夏に生まれたらどうすんの、名前？」

「な、夏？」

質問の意図を全く理解出来ないゆきほだったが、そんなことはお見通しとばかりにさくらは何も言わずノートの切れ端に丁寧な字で「榎」という字を書いた。

「あんた、これ読める？」

さくらは「榎」と書かれた紙をぴらぴらとゆきほの目の前で振って見せる。

「き、きなつ！」

「だあ、違う！　おい、クリス、この漢字をなんて読むかゆきほに教えてやれ」

真面目な顔で答えるゆきほに呆れながら、さくらは紙切れをクリスに渡して、そのまま背もたれにもたれて溜め息を吐いた。

「ええとね、ゆきほちゃん？　これはね『えのき』って読むのよ」

「えのき？　ってあのキノコのエノキ？」

「えーっと、キノコのエノキとはちょっと違うかな……えっと」

クリスは困った顔をさくらに向ける。

木の榎とキノコのエノキは違う、というのは何となく分かるが本当の所はよく分からない。実際、来栖クリスは樁や柎はわかるが、榎の木というものがどんなものであるか全く知らないのであった。だから、助け船をちょうだい、さくらちゃん。

……ということをクリスが考えているのだろうと、朝倉さくらはクリスの涙目から勝手に推測する。仕方ない、助け舟を出してやるう。

「いいか、ゆきほ。キノコのエノキかどうかはこの際置いてな、木に夏って書いたら『えのき』って読むんだよ。だったらお前の話だと夏に生まれた子供の名前はどうなるんだ？」

「それは、え、エノキちゃん？」

「そう、『エノキちゃん』だ。で、お前はこの名前でもいいのか？」

「……………」

さっきまでの騒がしさが嘘のように、ゆきほに沈黙が走る。



\*

「あう、いいと思ったんだけどなあ。木に季節の名前って」

頭のこぶを撫でながら、近年稀に見る超ド天然少女、雪野ゆきは傍にいる二人の友人に愚痴る。

「まあ、いいじゃないか。自分の子供が出来るなんて相当先のことさ。そんなことに頭回す暇があったらもっと別のことに使うべきだよ」

菜を挟んでいた文庫本を開きながら、少し変な文学少女 朝倉さくらは語る。

「私は良いと思うんですけどねえ、エノキちゃん」

新たなコーヒー牛乳を啜りながら、優しそうな不思議ちゃん 来栖クリスが呟く。

そんな三人が机を囲む放課後の教室は夕焼けで朱く染まっていた。

「あ、そうだ」

もう日も沈むという頃に雪野ゆきは、何かを思いついたようにノートの切れ端にボールペンで何かを書き始めた。それを覗き込む朝倉さくらと来栖クリス。

「これ、何て読むの？」

ゆきほがノートの切れ端を指差しながら二人にそう言った。夕日が照らす指先には「木」と「秋」という漢字が丸っこく書かれていた。

「木偏に秋か？ 椿とか柊みたいに木に秋がつく漢字ってことか？」  
訝しげな表情をゆきほに向けらさくら。

「木に秋ねえ。何て読むのかしら？ それにそんな字、今まで見たことないわねえ」

首を捻って考え込むクリス。

「でも、春と夏と冬はあるのに秋だけ無いって変じゃない？」

一文字の漢字を囲んで黙りこむ三人。そして、少しの時間が経って、夕日が沈み、三人を暗い色が包み込んだ。

「あははははは！！」

突如、笑い声が上がった。その笑い声は三人のうちの誰が発したものではなく、三人が同時に笑いだしたのだった。

さっきまで見ていた紙切れの字がもう暗くて読めなくなってしまう。そうして、彼女ら三人は笑いながら放課後の教室を後にした。

「そんな漢字あるわけないだろ、あはははは！」

そう言つと朝倉さくらはノートの切れ端をくしゃくしゃに丸めてそのままゴミ箱に投げ入れる。

「そうよねえ。見たことないし、それに木に秋はちよつとごちゃごちゃしすぎで変じゃないかしら?」

栗栖クリスは傍らの友人に笑顔で話し掛けながら、下足箱から革靴を取り出す。

「だよねー。さすがに木に秋はヘンテコだね……って、ちよつと待つてよ、二人とも! 置いてかないでよ!」

雪野ゆきは靴を急いで履いて、足がもつれて転びそうになりながらも先を歩いて行く二人を追い掛ける。

「なにやってんだー、置いてくぞー」

「そんなに急いでると、こけちゃうよー」

「大丈夫だつて、つて……ぎゃあ、へぶッ!」

誰かが転ぶ音、心配そうに掛け寄る足音、甲高い笑い声。

今日も彼女たちの放課後は笑い声に包まれていた。

(後書き)

ほのぼのを書こうとしていたら、書いてるうちに何を書いているのかよく分からなくなって、色々あってこうなりました。どうしてこうなった。

余談ですが、木に秋で『楸』と書いて読みは『ひさぎ』と読みます。ちゃんと実在する漢字です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8812r/>

---

放課後ガールズトーク

2011年10月5日20時28分発行